

ジャックと豆の木

楠山正雄 さく

—

むかしむかし、イギリスの大昔、アルフレッド大王の御代のことでございます。ロンドンの都からとおくはなれたいなかのこやに、やもめの女のひとが、ちいさいむすこのジャックをあいてに、さびしくくらししていました。かけがえのないひとりむすこですし、それに、ずいぶんのんきで、ずぼらで、

なまけものでしたが、ほんとうは気だてのやさしい子でしたから、母親は、あけてもくれても、ジャック、ジャックといって、それこそ目の中に入れてしまいたいくらいにかわいがって、なんにもしごとはさせず、ただ遊ばせておきました。

こんなふうで、のらくらむすこをかかえた上に、このやもめの人、どういふものか運がわるくて、



年年ものが足りたなくなるばかり、ある年の冬には、もう手まわりの道具や衣類いるいまで売って、手に入れたおかねも、手内職てないしよくなんかして、わずかばかりかせぎためたおかねも、きれいにつかってしまつて、とうとう、うちの中で、どうにかおかねになるものといつては、たった一ひぴきのこつた牝牛めうしだけになつてしまいました。

そこで、ある日、母親は、ジャックをよんで、

「ほんとうに、おかあさんは、自分のからだを半分もつて行かれるほどつらいけれど、いよいよ、あの牝牛を、手ばなさなければならぬことになつたのだよ。おまえ、ごくろうだけれど、市場いちばまで牛をつれて行って、いいひとをみつけて、

なるたけたかく売って来ておくれな。」といいました。

そこで、ジャックは、牛をひっぱって出かけました。

しばらくあるいて行くと、むこうから、肉屋の親方がやつて来ました。

「これこれ坊や、牝牛なんかひっぱって、どこへ行くのだい。」と、親方は声をかけました。

「売りに行くんだよ。」と、ジャックはこたえました。

「ふうん。」と、親方はいいながら、片手にもつた帽子をふつてみせました。がさがさ音がするので、気がついて、ジャックが、帽子のなかを、ふとのぞいてみますと、きみような形をした豆が、袋の中から、ちらちらみえました。

「やあ、きれいな豆だなあ。」

そうジャックはおもって、なんだか、むやみとそれがほしくなりました。そのようすを、相手の男は、すぐと見つけてしまいました。そして、このすこしたりない、こどもを、うまくひっかけてやろうとおもって、わざと袋の口をくちあけてみせて、

「坊ぼうや、これがほしいんだろう。」といいました。

ジャックは、そういわれて、大にこにこになると、親方はもったいらしく首をふって、「いけない、いけない、こりやあふしぎな、魔法の豆さ。どうして、ただではあげられない。どうだ、その牝牛と、とりかえっこしようかね。」いいま

した。

ジャックは、その男のいうなりに、牝牛と豆の袋ととりかえっこしました。そして、おたがい、これはとんだもうけものをしたとおもって、ほくほくしながら、わかれました。

ジャックは、豆の袋をかかえて、うちまでとんでかえりました。うちへはいるか、はいらないに、ジャックは、
「おかあさん、きょうはほんとに、うまく行ったよ。」と、いきなりそういって、だいとくいで、牛と豆のとりかえっこした話をしました。ところが、母親は、それをきいてよろこぶどころか、あべこべにひどくしかりました。

「まあ、なんというばかなことをしてくれたのだね。ほんと

にあきれてしまう。こんなつまらない、えんどう豆の袋なんかにつられて、だいじな牝牛一ぴき、もとも子もなくしてしまうなんて、神さま、まあ、このばかな子をどうしましょう。」

母親はぶんぶんおこって、いまいましそうに、窓のそとへ、袋の中の豆をのこらず、なげすててしまいました。そして、つくづくなさけなさそうに、しくんしくん、泣きだしました。きつとよろこんでもらえるとおもっていると、あべこべに、うまれてはじめて、おかあさんのこんなにおこった顔を見たので、ジャックはびっくりして、じぶんもかなしくなりました。そして、なんにもたべるものがないので、おなかのすいたまま、その晩はやくから、ころんとねてしまいました。

そのあくる朝、ジャックは目をさまして、もう夜があけたのに、なんだかくらいなとおもって、ふと窓のそとをみました。するとどうでしょう、きのう庭になげすてた豆の種子^{たね}から、芽が生えて、ひと晩のうちに、ふとい、じょうぶそうなら、豆の大木が、みあげるほどたかくのびて、それこそ庭いっばい、うっそうとしげっているではありませんか。

びっくりしてとびおきて、すぐと庭へおりてみますと、どうして、たかいといって、豆の木は、それこそほうずのしれないたかさに、空の上までものびていました。つると葉とがからみあって、それは、空の中をどんとつきぬけて、まるで豆の木のはしごのように、しっかりと立っていました。

「あれをつたわって、てっぺんまでのぼって行ったら、ぜんたいどこまで行けるかしら。」

そうおもって、ジャックは、すぐとはしごをのぼりはじめました。だんだんのぼって行くうち、ジャックの家は、ずんずん、ずんずん、目の下でちいさくなって行きました。そしていつのまにかみえなくなっていました。それでもまだてっぺんには来ていませんでした。ジャックは、いったいどこまで行くのかとおもって、すこしきみがわるくなりました。それでもいっしょうけんめい、はしごにしがみついて、のぼって行きました。あんまりたかくのぼって、目はくらむし、手も足もくたびれきって、もうしびれて、ふらふらになりかけたころ、やっとてっぺんにのぼりつきました。

二

ジャックは、そのとき、まずそこらを見まわしました。すると、そこはふしぎな国で、青あおとしげった、しずかな森がありました。うつくしい花のさいている草原もありました。^{すいししょう}水晶のようにきれいな水のながれている川もありました。こんなたかい空の上に、こんなきれいな国があるうとは、おもってもいませんでしたから、ジャックはあっけにとられて、ただきよんとしていました。

いつもまにか、ふと、赤い角^{かく}ずきんをかぶった、みょうな

顔のおばあさんが、どこから出て来たか、ふと目の前にあらわれました。ジャックは、ふしぎそうに、このみょうな顔をしたおばあさんを見つめました。おばあさんは、でも、やさしい声でいいました。

「そんなにびつくりしないでいいのだよ。わたしはいい、お前さんたち一家のものを守ってあげている妖女なのだけれど、この五、六年のあいだというものは、わるい魔ものために、魔法でしばられていて、お前さんたちをたすけてあげることができなかつたのさ。だが、こんどやっと魔法がとけたから、これからはおもいのままに、助けてあげられるだろうよ。」

だしぬけに、こんなことをいわれて、ジャックは、なおさらあっけにとられてしまいました。そのぽかんとした顔を、妖女はおもしろそうにながめながら、そのわけをくわしく話しました。それをかいつまんでいうと、まあこんなものでした。

「ここからそうとおくはない所に、おそろしい鬼の大男が、すみかにしている、お城のような家がある。じつはその鬼が、むかし、そのお城に住んでいたお前のおとうさんをころして、城といっしょに、そのもっていたおたからのこらずとってしまったものだから、お前のうちは、すっかり貧乏になっ

びんぼう

そうに、お前のおかあさんのふところにだかれたまま、下界げかいにおちぶれて、なさけないくらしをするようになったのだよ。だから、もういちど、そのたからをとりかえして、わるいその鬼を、ひどいめにあわしてやるのが、お前のやくめなのだよ。」

こういうふうにいきかされると、ぐうたらなジャックのころも、ぴんと張はってきました。知らないおとうさんのことが、なつかしくなって、どうしてもこの鬼をこらしめて、かすめられたたからを、とりかえさなくてはならないとおもいました。そうおもって、とてもいさましい気になって、おなかのすいていることも、くたびれていることも、きれいに

わすれてしまいました。そこで、妖女にお礼をいってわかれますと、さっそく、鬼の住んでいるお城におかかって、いそいで行きました。

やがて、お日さまが西にしずむころ、ジャックは、なるほどお城のように大きな家の前に来ました。

まず、とんとんと門をたたくと、なかから、目のひとつしかない、鬼のお上かみさんが出て来ました。きみのわるい顔にに似あわず、鬼のお上さんは、ジャックのひもじそうなようすをみて、かわいそうにおもいました。それで、さもこまったように首をふって、

「いけない、いけない。きのどくだけれど、とめてあげるこ

とはできないよ。ここは、人くい鬼のうちだから、みつかる
と、晩のごはんのかわりに、すぐたべられてしまうからね。」
といいました。

「どうか、おばさん、知れないようにしてとめてくださいよ。
ぼく、もうくたびれて、ひと足もあるけないんです。」と、た
のおむように、ジャックはいいました。

「しかたのない子だね。じゃあ今夜だけとめてあげるから、
朝になったら、すぐおかえりよ。」

こういつているさいちゅう、にわかにならずしん、ずしん、地
ひびきするほど大きな足音がきこえて来ました。それは主人
の人くい鬼が、もう、そとからかえって来たのです。鬼のお

上さんは、大あわてにあわてて、ジャックを、だんろの中に
かくしてしまいました。

鬼は、へやの中にはいると、いきなり、ふうと鼻をならし
ながら、たれだつてびっくりしてふるえ上がるような大ごえ
で、

「フン、フン、フン、

イギリス人の香かがするぞ。

生きていようが死んでよが、

骨ごとひいてパンにしよぞ。」

と、いいました。すると、お上さんが、

「いいえ、それはあなたが、つかまえて、土の牢ろうに入れてあ

るひとたちの、においでしよう。」といいました。

けれど鬼の大男は、まだきよろきよろそこらを見まわして、鼻をくんくんやっていた。でも、どうしても、ジャックをみつけることができませんでした。

とうとうあきらめて、鬼は、椅子いすの上に腰こしをおろしました。そしてががつ、がぶがぶ、たべたりのんだりしはじめました。そっとジャックがのぞいてみますと、それはあとからあとから、いつおしまいになるかとおもうほどかっこむので、ジャックは、目ばかりまるくしていました。さて、たふくたべてのんだあげく、お上さんに、

「おい、にわとりをつれてこい。」といいつけました。

それは、ふしぎなめんどりでした。テーブルの上のせて、鬼が、

「生め。」といいますと、すぐ金のたまごをひとつ生みました。鬼がまた、

「生め。」といいますと、またひとつ、金のたまごを生みました。

「やあ、ずいぶん、とくなにわとりだな。おとうさんのおたからというのは、きつとこれにちがいない。」と、下からそつとながめながら、ジャックはそうおもいました。

鬼はおもしろがって、あとからあとから、いくつもいくつも、金のたまごを生ましているうち、おなかがはってねむた

くなつたとみえて、ぐすぐすと壁かべのうごくほどすごい大いびきを立てながら、ぐっすりねこんでしまいました。

ジャックは、鬼のすっかりねむったのを見すまして、ちようど鬼のお上さんが、台所へ行っているのをさいわい、そつとだんろの中からぬけだしました。そして、テーブルの上のめんどりを、ちよろり小わきにかかえて、すたこらお城を出て行きました。

それから、どンドン、どンドン、かけだして行って、豆の木のはしごのかかっている所までくると、するするとつたわっておりて、うちへかえりました。

ジャックのおかあさんは、むすこが、鬼か魔女にでもとられたのではないかと心配していますと、ぶじでひよっこりかえつて来たので、とても大きわぎしてよろこびました。それから、ジャックのもつてかえった、金のたまごを生むにわとりのおかげで、おや子はお金もちにもなりましたし、しあわせにもなりました。

三

しばらくすると、ジャックはまた、もういちど空の上のお城に行ってみたくなりました。そこで、こんどは、すっかり先せんとちがったふうをして、ある日、豆の木のはしごを、またするするとのぼって行きました。鬼のお城に行って、門をた

たくと、鬼のお上さんが出てきました。ジャックが、またかなしそうに、とめてもらいたいといって、たのみますと、お上さんは、まさかジャックとは気がつかないようでした。それでも手をふって、

「いけない、いけない。この前も、お前とおなじような貧乏たらしいこどもをとめて、主人のだいじなにわとりを、ちよつくらもって行かれた。それからはい晩、そのことをいいだして、わたしが、しかられどおし、しかられているじゃないか。またもあんなひどいめにあうのはこりこりだよ。」といいました。

それでも、ジャックは、しつっこくたのんで、とうとう中へ入れてもらいました。するうち、大男がかえって来て、また、そこらをくんくんかいでまわりましたが、ジャックは、あかがねの箱の中にかくれているので、どうしてもみつけられませんでした。

大男は、この前とおなじように、晩ばんの食事をたらふくやっただあとで、こんどは、金のたまごをうむにわとりの代りに、金や銀のおたからのたくさんつまった袋を出させて、それをざあつとテーブルの上にあけて、一枚一枚かぞえてみて、それから、おはじきでもしてあそぶように、それをチャラチャラいわせて、さんざんあそんでいましたが、ひととおりたのしむと、また袋の中にしまって、ひもをかたくしめました。

そして、天井にひびくほどの大あくび、ひとつして、それなりぐうぐう、大いびきでねてしまいました。

そこで、こんども、ジャックは、そろりそろり、あかがねの箱からはい出して、金と銀のおたからのいっぱいつまった袋を、両方の腕に、しっかりかかえるがはやいか、さっさとにげだして行きました。ところが、この袋の番人に、一ぴきの小犬がつけてあったので、そいつが、とたんに、きゃんきゃん吠^ほえだしました。

ジャックは、こんどこそだめだとおもいました。それでも、大男は、とても死んだようによくね入っていて、目をさましませんでした。ジャックはむちゅうで、あとをもみずにとんどん、とんどん、かけて行って、とうとう豆の木のはしごに行きつきました。

さて、にわとりとちがって、こんどはおもたい金と銀の袋をはこぶのに、ほねがおれました。それでもがまんして、うんすら、うんすら、ふつかがかかりで、豆の木のはしごを、ジャックはおりました。

やっとこさ、うちまでたどりつくくと、おかあさんは、ジャックがいなくなったので、すっかり、がっかりして、ひどい病人になって、戸をしめてねていました。それでも、ぶじなジャックの顔をみると、まるで死んだ人が生きかえたようになつて、それからずんずんよくなつて、やがて、しゃんしゃ

んあるきだしました。その上、お金がたくさんできたときいて、よけいげんきになりました。

四

こうして、またしばらくの間、ジャックは、うちで、おとなしくしていました。するうち、だんだん、からだじゅう、むずむずして来ました。もうまた天上てんじょうしたくなって、まいにち、豆の木のはしごばかりながめていました。するとそれが気になって、気になって、気がふさいで来ました。

そこで、ジャックは、ある日また、そつと豆の木のはしごをつたわってのぼりました。こんども顔から姿から、すっか

りほかのこどもになって行きましたから、鬼のお上さんは、まただまされて、中に入れました。そして、大男がかえると、あわてて、お釜かまのなかにかくしてくれました。

鬼の大男は、へやの中じゅうかぎまわって、ふん、ふん、人くさいぞといいました。そして、こんどは、なんでもさがしだしてやるといって、へやの中のもの、ひとつひとつみてまわりました。そしてさいごに、ジャックのかくれているお釜のふたに手をかけました。ジャックは、ああ、こんどこそだめだとおもって、ふるえていますと、それこそ妖女がまもっていてくれるのでしょいか、大男は、ふと気がかわって、それなりろばたにすわりこんで、

「まあいいや。はらがすいた。晩飯にしようよ。」といいました。

さて、晩飯がすむと、大男はお上さんに、

「にわとりはとられる、金の袋、銀の袋はぬすまれる、しかたがない、こん夜はハープでもならすかな。」といいました。

ジャックが、そっとお釜のふたをあけてのぞいてみますと、玉でかざった、みごとなハープのたて琴が目にはいりました。

鬼の大男は、ハープをテーブルの上のせて、

「なりだせ。」といいました。

すると、ハープは、ひとりでになりだしました。しかもその音のうつくしいことといったら、どんな楽器だって、とて

もこれだけの音にはひびかないほどでしたから、ジャックは、金のたまごのにわとりよりも、金と銀とのいっばいつまった袋よりも、もっともって、このハープがほしくなりました。

するうち、ハープの音楽を、たのしい子守うたにして、さすがの鬼が、いい心もちにねむってしまいました。ジャックは、しめたとおもって、そっとお釜の中からぬけだすと、すばやくハープをかかえてにげだしました。ところが、あいにく、このハープには、魔法がしかけてあって、とたんに、大きな声で、

「おきろよ、だんなさん、おきろよ、だんなさん。」と、どなりました。

これで、大男も目をさました。むうんと立ち上がってみると、ちっぽけな小僧が、大きなハーブを、やつこらさとかかえて、にげて行くのがみえました。

「待て小僧、きさま、にわとりをぬすんで、金の袋、銀の袋をぬすんで、こんどはハーブまでぬすむのかあ。」と、大男はわめきながら、あとを追っかけました。

「つかまるならつかまえてみる。」

ジャックは、まけずにどなりながら、それでもいっしょうけんめいかけました。大男も、お酒によった足をふみしめふみしめ、よたよたはしりました。そのあいだ、ハーブは、たえず、からんからん、なりつづけました。

やっそこさと、豆の木のはしごの所までくると、ジャックは、ハーブにむかって、

「もうやめろ。」といいますが、それなりハーブはだまりました。ジャックは、ハーブをかかえて、豆の木のはしごをおりはじめました。はるか目の下に、おかあさんが、こやの前に立って、泣きはらした目で、空をみつめていました。

そうこうするうち、大男が追っついてきて、もう片足、はしごにかけました。

「おかあさん、お泣きでない。」と、ジャックは、上からせいっぱいよびました。

「それよか、斧おのをもってきておくれ。はやく、はやく。」

もう一分もまたれません。大男はみしり、みしり、はしごをつたわって来ます。ジャックは、気が気ではありません、身のかるいのをさいわいに、ハープをかかえたなり、はしごの途中、つばめのようなはやわざで、くるりとひっくりかえって、たかい上からとびおりました。そこへおかあさんが、斧をもってかけつけたので、ジャックは斧をふるって、いきなり、はしごの根もとから、ぷつつり切りはなしました。そのとき、まだ、はしごの中ほどをおりかけていた大男が、切れた豆のつるをつかんだまま、大きなからだのおもみで、ずしんと、それこそ地びたが、めりこむような音を立てて、落ちてきました。そして、それなり、目をまわして死んでしまいました。

ちょうどそのとき、いつぞや、はじめてジャックにあって、道をおしえてくれた妖女が、こんどはまるでちがって、目のさめるように美しい女の人の姿になって、またそこへ出て来ました。きらびやかに品のいい貴婦人きふじんのような身なりをして、白い杖を手にもっていました。杖のあたまには、純金じゆんきんのくじやくを、とまらせていました。そしてふしぎな豆が、ジャックの手にはいるようになったのも、ジャックをためすために、自分がはからってしたことだといって、

「あのとき、豆のはしごをみて、すぐそのまま、どこまでものぼって行こうという気をおこしたのが、そもそもジャック

クの運のひらけるはじめだったので。あれを、ただぼんやり、ふしぎだなあとおもってながめたなり、すぎてしまえば、とりかえっこした牝牛^{めうし}は、よし手にもどることがあるにしても、あなたたちは、あいかわらず貧乏でくらさなければならぬ。だから、豆の木のはしごをのぼったのが、とりもなおさず、幸運のはしごをのぼったわけなのだよ。」

と、こう妖女は、いきかせて、ジャックにも、ジャックのおかあさんにもわかれて、かえって行きました。

底本：「世界おとぎ文庫(イギリス・フランス童話篇)妖女のおくりもの」
小峰書店

1950(昭和25)年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、
底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャックと豆の木

楠山正雄

—
むかしむかし、イギリスの大昔、アルフレッド大王の御代のことでございます。ロンドンの都からとおくはなれたいなかのこやに、やもめの女

のひとが、ちいさいむすこのジャックをあいてに、さびしくくらししていました。かけがえのないひとりむすこですし、それに、ずいぶんのんきで、ずぼらで、なまけものでしたが、ほんとうは気だての

やさしい子でしたから、母親は、あけてもくれても、ジャック、ジャックといって、それこそ目の中に入れてしまいたいくらいにかわいがつて、なんにもしごとはさせず、ただ遊ばせておきました。

のが足りなくなるばかり、あ
る年の冬には、もう手まわりの道具や衣類まで売って、手に入れた

こんなふうで、のらくらむすこをかかえた上に、このやもめの人、どういふものか運がわるくて、年年も



おかねも、てないしょく手内職なんかして、わずかばかりかせぎためたおかねも、きれいにつかっ
てしまっ、とうとう、うち
の中で、どうにかおかねにな
るものといつては、たった一
ぴきのこった牝牛めうしだけになっ
てしまいました。

そこで、ある日、母親は、
ジャックをよんで、
「ほんとうに、おかあさんは、

ひっぱって出かけました。

しばらくあるいて行くと、
むこうから、肉屋の親方が
やって来ました。

「これこれ坊や、牝牛なんか
ひっぱって、どこへ行くのだ
い。」と、親方は声をかけまし
た。

「売りに行くんだよ。」と、
ジャックはこたえました。
「ふうん。」と、親方はいいな

自分のからだを半分もって行
かれるほどつらいけれど、い
よいよ、あの牝牛を、手ばな
さなければならぬことに
なったのだよ。おまえ、ごく
ろうだけれど、市場いちばまで牛を
つれて行って、いいひとをみ
つけて、なるたけたかく売っ
て来ておくれな。」といいま
した。

そこで、ジャックは、牛を

がら、片手にもった帽子を
ふってみせました。がさがさ
音がするので、気がついて、
ジャックが、帽子のなかを、
ふとのぞいてみますと、き
みような形をした豆が、袋の
中から、ちらちらみえました。

「やあ、きれいな豆だなあ。」
そうジャックはおもって、
なんだか、おやみとそれがほ
しくなりました。そのようす

を、相手の男は、すぐと見つけてしまいました。そして、このすこしたりない、こどもを、うまくひっかけてやろうとおもって、わざと袋の口をくちあけてみせて、

「坊ぼうや、これがほしいんだらう。」といいました。

ジャックは、そういわれて、大にここにになると、親方はもったいらしく首をふって、

くほくしながら、わかれました。

ジャックは、豆の袋をかかえて、うちまでとんでかえりました。うちへはいるか、はいらないに、ジャックは、「おかあさん、きょうはほんとに、うまく行ったよ。」と、いきなりそういって、だいきいで、牛と豆のとりかえっこした話をしました。ところ

「いけない、いけない、こりやあふしぎな、魔法の豆さ。どうして、ただではあげられない。どうだ、その牝牛と、とりかえっこしようかね。」といいました。

ジャックは、その男のいうなりに、牝牛と豆の袋ととりかえっこしました。そして、おたがい、これはとんだもうけものをしたとおもって、ほ

が、母親は、それをきいてよろこぶどころか、あべこべにひどくしかりました。

「まあ、なんと**いう**ばかなことをしてくれたのだね。ほんとにあきれてしまう。こんなつまらない、えんどう豆の袋なんかにつられて、だいいじな牝牛一びき、もとも子もなくしてしまふなんて、神さま、まあ、このばかな子をどうし

ましよう。」

母親はぶんぶんおこって、いまいましそうに、窓のそとへ、袋の中の豆をのこらず、なげすててしまいました。そして、つくづくなさけなさそくに、しくんしくん、泣きだしました。

きっとよろこんでもらえるとおもっていると、あべこべに、うまれてはじめて、おか

おもって、ふと窓のそとをみました。するとどうでしょう、きのう庭になげすてた豆の種子たねから、芽が生えて、ひと晩のうちに、ふとい、じょうぶそうな豆の大木が、みあげるほどたかくのびて、それこそ庭いっぱい、うっそうとしげっているではありませんせんか。

びっくりしてとびおきて、

あさんのこんなにおこった顔をみたので、ジャックはびっくりして、じぶんもかなしくなりました。そして、なんにもたべるものがないので、おなかのすいたまま、その晩はやくから、ころんとねてしまいました。

そのあくる朝、ジャックは目をさまして、もう夜があけたのに、なんだかくらいなと

すぐと庭へおりてみますと、どうして、たかいといって、豆の木は、それこそぼうずのしれないたかさに、空の上までものびていました。つると葉とがからみあって、それは、空の中をどんとつきぬけて、まるで豆の木のはしごのように、しっかりと立っていました。

「あれをつたわって、てっぺ

んまでのぼって行ったら、ぜんたいどこまで行けるかしら。」

そうおもって、ジャックは、すぐとはしごをのぼりはじめました。だんだんのぼって行くうち、ジャックの家は、ずんずん、ずんずん、目の下でちいさくなって行きました。そしていつのまにかみえなくなってしまうました。それで

ろ、やっとてっぺんにのぼりつきました。

二

ジャックは、そのとき、ま

ずそこらを見まわしました。すると、そこはふしぎな国で、青あおとしげった、しずかな森がありました。うつくしい花のさいている草原もありました。水晶すいしょうのようにきれいな

もまだてっぺんには来ていませんでした。ジャックは、いったいどこまで行くのかとおもって、すこしきみがわることになりました。それでもいっしょうけんめい、はしごにしがみついて、のぼって行きました。あんまりたかくのぼって、目はくらむし、手も足もくたびれきって、もうしびれて、ふらふらになりかけたこ

水のながれている川もありました。こんなたかい空の上

に、こんなきれいな国があるうとは、おもってもいけませんでしたから、ジャックはあつけにとられて、ただきよとんとしていました。いつもまにか、ふと、赤い角かくずきんをかぶった、みょうな顔のおばあさんが、どこから出て来たか、ふと目の前に

あらわれました。ジャックは、ふしぎそうに、このみよ
うな顔をしたおばあさんをみ
つめました。おばあさんは、
でも、やさしい声でいいまし
た。

「そんなにびつくりしないで
もいいのだよ。わたしはいつ
たい、お前さんたち一家いっかのも
のを守ってあげている妖女ようじよな
のだけれど、この五、六年の

ました。そのぼかんとした顔
を、妖女はおもしろそうにな
がめながら、そのわけをくわ
しく話しました。それを
かいつまんでいうと、まあこ
んなものでした。

「ここからそうとおくはない
所ところに、おそろしい鬼の大男が、
すみかにしている、お城のよ
うな家がある。じつはその鬼
が、むかし、そのお城に住ん

あいだというものは、わるい
魔まもののために、魔法まほうでしば
られていて、お前さんたちを
たすけてあげることができな
かったのさ。だが、こんど
やっと魔法がとけたから、こ
れからはおもいのままに、助たす
けてあげられるだろうよ。」

でいたお前のおとうさんをこ
ろして、城といっしよに、そ
のもっていたおたからのこら
ずとってしまったものだけ
ら、お前のうちは、すっかり
貧乏びんぼうになってしまったのさ。

そうしてお前も、赤ちゃんあかちゃんの
ときから、かわいそうに、お
前のおかあさんのふところところに
だかれたまま、下界げかいにおちぶ
れて、なさけないくらしをす

るようになったのだよ。だから、もういちど、そのたからをとりかえして、わるいその鬼を、ひどいめにあわしてやるのが、お前のやくめなのだよ。」

こういうふうにいきかされる、ぐうたらなジャックのころも、ぴんと張^はってきました。知らないおとうさんのことが、なつかしくなっ

て、いそいで行きました。

やがて、お日さまが西にせずむころ、ジャックは、なるほどお城のように大きな家の前に来ました。

まず、とんとんと門をたたくと、なかから、目のひとつしかない、鬼のお上^{かみ}さんが出て来ました。きみのわるい顔に似^に合^あわず、鬼のお上^{かみ}さんは、

どうしてもこの鬼をこらしめて、かすめられたたからを、とりかえさなくてはならないとおもいました。そうおもって、とてもいさましい気になつて、おなかのすいていることも、くたびれていることも、きれいにわすれてしまいました。そこで、妖女にお礼をいってわかれますと、さっそく、鬼の住んでいるお城に

ジャックのひもじそうなようすをみて、かわいそうにおもいました。それで、さもこまったように首をふって、「いけない、いけない。きのごくだけれど、とめてあげることにはできないよ。ここは、人くい鬼のうちだから、みつかると、晩のごはんのかわりに、すぐたべられてしまうからね。」といいました。

「どうか、おばさん、知れないようにしてとめてくださいよ。ぼく、もうくたびれて、ひと足もあるけないんです。」と、たのおように、ジャックはいいました。

「しかたのない子だね。じゃあ今夜だけとめてあげるから、朝になったら、すぐおかえりよ。」

こういつているさいちゆ

ながら、たれだってびっくりしてふるえ上がるような大ごえで、

「フン、フン、フン、イギリス人の香かがするぞ。

生きていようが死んでよが、骨ごとひいてパンにしよぞ。」

と、いいました。すると、お上さんが、

う、にわかにはしん、ずしん、地ひびきするほど大きな足音がきこえて来ました。それは主人の人くい鬼が、もう、そこからかえって来たのです。鬼のお上さんは、大あわてにあわてて、ジャックを、だんろの中にかくしてしまいました。

鬼は、へやの中にはいると、いきなり、ふうと鼻をならし

「いいえ、それはあなたが、つかまえて、土の牢ろうに入れてあるひとたちの、においてしよう。」といいました。

けれど鬼の大男は、まだきよろきよろそこらを見まわして、鼻をくんくんやっていました。でも、どうしても、ジャックをみつけることができませんでした。

とうとうあきらめて、鬼は、

椅子の上に腰をおろしました。そしてががつ、がぶがぶ、たべたりのんだりしはじめました。そつとジャックがのぞいてみますと、それはあとからあとから、いつおしまいになるかとおもうほどかっこむので、ジャックは、目ばかりまるくしていました。さて、たらふくたべてのんだあげく、お上さんに、

「やあ、ずいぶん、とくになにわとりだな。おとうさんのおたからというのは、きつとこれにちがいない。」と、下からそつとながめながら、ジャックはそうおもいました。鬼はおもしろがって、あとからあとから、いくつもいくつも、金のたまごを生ましているうち、おなかがはってねむたくなつたとみえて、ぐす

「おい、にわとりをつれてこい。」といいつけました。

それは、ふしぎなめんどりでした。テーブルの上のせて、鬼が、

「生め。」といいますと、すぐ金のたまごをひとつ生みました。鬼がまた、

「生め。」といいますと、またひとつ、金のたまごを生みました。

ぐすと壁のうごくほどすごい大いびきを立てながら、ぐつすりねこんでしまいました。

ジャックは、鬼のすっかりねむったのを見すまして、ちようと鬼のお上さんが、台所へ行っているのをさいわい、そつとだんろの中からぬけだしました。そして、テーブルの上のめんどりを、ちよろり小わきにかかえて、すた

こちらお城を出て行きました。

それから、どんどん、どんだん、かけだして行って、豆の木のはしごのかかっている所までくると、するするとつたわっておりて、うちへかえりました。

ジャックのおかあさんは、おすこが、鬼か魔女にでもとられたのではないかと心配していますと、ぶじでひよっこ

はまた、もういちど空の上のお城に行ってみたくなりました。そこで、こんどは、すっかり先^{せん}とちがったふうをして、ある日、豆の木のはしごを、またするするとのぼって行きました。鬼のお城に行つて、門をたたくと、鬼のお上さんが出てきました。ジャックが、またかなしそうに、ためてもらいたいといって、た

りかえって来たので、とても大さわぎしてよろこびました。それからは、ジャックのもってかえった、金のたまごを生むにわとりのおかげで、おや子はお金もちにもなりましたし、しあわせにもなりました。

三

しばらくすると、ジャック

のみますと、お上さんは、まさかジャックとは気がつかないようでしたが、それでも手をふって、

「いけない、いけない。この前も、お前とおなじような貧乏たらしいこどもをとめて、主人のだいじなにわとりを、ちよっくらもって行かれた。それからはいまい晩、そのことをいいだして、わたしが、し

かられどおし、しかられてい
るじゃないか。またもあんな
ひどいめにあうのはこりこり
だよ。」といいました。

それでも、ジャックは、し
つつこくたのんで、とうとう
中へ入れてもらいました。す
るうち、大男がかえって来て、
また、そこらをくんくんかい
でまわりましたが、ジャック
は、あかがねの箱の中にかく

きでもしてあそぶように、そ
れをチャラチャラいわせて、
さんざんあそんでいました
が、ひととおりたのしむと、
また袋の中にしまつて、ひも
をかたくしめました。そし
て、天井にひびくほどの大あ
くび、ひとつして、それなり
ぐうぐう、大いびきでねてし
まいました。

そこで、こんども、ジャッ

れているので、どうしてもみ
つかりませんでした。

大男は、この前とおなじよ
うに、晩ばんの食事をたらふく
やったあとで、こんどは、金
のたまごをうむにわとりの代
りに、金や銀のおたからのた
くさんつまった袋を出させ
て、それをざあっとテーブル
の上にあけて、一枚一枚かぞ
えてみて、それから、おはじ

クは、そろりそろり、あかが
ねの箱からはいだして、金と
銀のおたからのいっぱいつ
まった袋を、両方の腕に、しっ
かりかかえるがはやいか、
さっさとにげだして行きまし
た。ところが、この袋の番人
に、一ぴきの小犬がつけて
あったので、そいつが、とた
んに、きゃんきゃん吠ほえだし
ました。

ジャックは、こんどこそだめだとおもいました。それでも、大男は、とても死んだようによくね入っていて、目をさましませんでした。ジャックはむちゅうで、あとをもみずにどんどん、どんどん、かけて行って、とうとう豆の木のはしごに行きつきました。さて、にわとりとちがって、こんどはおもたい金と銀の袋

も、ぶじなジャックの顔をみると、まるで死んだ人が生きかえったようになって、それからずんずんよくなって、やがて、しゃんしゃんあるきだしました。その上、お金がたくさんできたときいて、よけいげんきになりました。

四

こうして、またしばらくの

をはこぶのに、ほねがおれました。それでもがまんして、うんすら、うんすら、ふつかがかりで、豆の木のはしごを、ジャックはおりました。やっところさ、うちまでたどりつくと、おかあさんは、ジャックがいなくなったので、すっかり、がっかりして、ひどい病人になって、戸を閉めてねていました。それで

間、ジャックは、うちで、おとなしくしていました。するうち、だんだん、からだじゅう、むずむずして来ました。もうまた天上てんじょうしたくなって、まいにち、豆の木のはしごばかりながめていました。するとそれが気になって、気になって、気がふさいで来ました。

そこで、ジャックは、ある

日また、そつと豆の木のはしごをつたわってのぼりました。こんども顔から姿から、すっかりほかのこどもになって行きましたから、鬼のお上さんは、まただまされて、中に入れました。そして、大男がかえると、あわてて、お釜かまのなかにかくしてくれました。

鬼の大男は、へやの中じゅ

こそ妖女がまもっていてくれるのでしようか、大男は、ふと気がかわって、それなりろばたにすわりこんで、「まあいいや。はらがすいた。晩飯にしようよ。」といいました。

さて、晩飯がすむと、大男はお上さんに、

「にわとりはとられる、金の袋、銀の袋はぬすまれる、し

うかぎまわって、ふん、ふん、人くさいぞといいました。そして、こんどは、なんでもさがしだしてやるといって、へやの中のものを、ひとつひとつみてまわりました。そしてさいごに、ジャックのかくれているお釜のふたに手をかけました。ジャックは、ああ、こんどこそだめだとおもって、ふるえていますと、それ

かたがない、こん夜やはハーブでもならすかな。」といいました。

ジャックが、そつとお釜のふたをあけてのぞいてみますと、玉でかざった、みごとなハーブのたて琴ごとが目にはいりました。

鬼の大男は、ハーブをテーブルの上ののせて、「なりだせ。」といいました。

すると、ハープは、ひとりでになりだしました。しかもその音のうつくしいことと、いったら、どんな楽器だっ、とてもこれだけの音にはひびかないほどでしたから、ジャックは、金のたまごのわとりよりも、金と銀とのいっばいつまった袋よりも、もっともつと、このハープがほしくなりました。

「おきろよ、だんなさん、おきろよ、だんなさん。」と、どなりました。

これで、大男も目をさましました。むうんと立ち上がってみると、ちっぽけな小僧が、大きなハープを、やつこらさとかかえて、にげて行くのがみえました。

「待て小僧、きさま、にわとりをぬすんで、金の袋、銀の

するうち、ハープの音楽を、たのしい子守うたにして、さすがの鬼が、いい心もちにねむってしまった。ジャックは、しめたとおもって、そっとお釜の中からぬけだすと、すばやくハープをかかえてにげだしました。ところが、あいにく、このハープには、魔法がしかけてあって、とたんに、大きな声で、

袋をぬすんで、こんどはハープまでぬすむのかあ。」と、大男はわめきながら、あとを追っかけました。

「つかまるならつかまえてみる。」

ジャックは、まけずにどなりながら、それでもいっしゅうけんめいかけました。大男も、お酒によった足をふみしめふみしめ、よたよたはしり

ました。そのあいだ、ハーブは、たえず、からんからん、なりつづけました。

やっとこさと、豆の木のはしごの所までくると、ジャックは、ハーブにむかって、「もうやめろ。」といいますと、それなりハーブはだまりました。ジャックは、ハーブをかかえて、豆の木のはしごをおりはじめました。はるか

おくれ。はやく、はやく。」もう一分もまたれませんか。大男はみしり、みしり、はしごをつたわって来ます。ジャックは、気が気ではありません、身のかるいのをさいわいに、ハーブをかかえたな^{とちゅう}り、はしごの途中、つばめのようなはやわざで、くるりとひっくりかえって、たかい上からとびおりました。そこへ

目の下に、おかあさんが、こやの前に立って、泣きはらした目で、空をみつめていました。

そうこうするうち、大男が追っついてきて、もう片足、はしごにかけました。「おかあさん、お泣きでない。」と、ジャックは、上からせいっぱいよびました。「それよか、斧^{おの}をもってきて

おかあさんが、斧をもってかけつけたので、ジャックは斧をふるって、いきなり、はしごの根もとから、ぷっつり切りはなしました。そのとき、まだ、はしごの中ほどをおりかけていた大男が、切れた豆のつるをつかんだまま、大きなからだのおもみで、ずしんと、それこそ地びたが、めりこむような音を立てて、落ち

てきました。そして、それなり、目をまわして死んでしまいました。

ちようどそのとき、いつぞや、はじめてジャックにあって、道をおしえてくれた妖女が、こんどはまるでちがって、目のさめるように美しい女の人の姿になって、またそこへ出て来ました。きらびやかに品のいい貴婦人きふじんのような身な

でもものぼって行こうという気をおこしたのが、そもそもジャックの運のひらけるはじめだったのです。あれを、ただぼんやり、ふしぎだなあとおもってながめたなり、すぎためうし牝牛は、よし手にもどるところがあるにしても、あなたたちは、あいかわらず貧乏でくらすなければならぬ。だか

りをして、白い杖を手にもっていました。杖のあたまには、純金じゆんきんのくじやくを、とまらせていました。そしてふしぎな豆が、ジャックの手にはいるようになったのも、ジャックをためすために、自分からはからってしたことだといって、

「あのとき、豆のはしごをみて、すぐとそのまま、どこまら、豆の木のはしごをのぼったのが、とりもなおさず、幸運のはしごをのぼったわけなのだよ。」
と、こう妖女は、いいきかせて、ジャックにも、ジャックのおかあさんにもわかれて、かえって行きました。

底本：「世界おとぎ文庫(イギリス・フランス童話篇)

妖女のおくりもの」小峰書店

1950 (昭和 25) 年 5 月 1 日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業
指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006 年 1 月 21 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャックと豆の木

楠山正雄 さく

—

むかしむかし、イギリスの大昔、アルフレッド大王の御代のことです。ロンドンの都からとおくはなれたいなかのこやに、やもめの女のひとが、ちいさいむすこのジャックをあいてに、さびしくく

らしてしまいました。かけがえのないひとりむすこですし、それに、ずいぶんのんきで、ずぼらで、なまけものでしたが、ほんとうは気だてのやさしい子でしたから、母親は、あけてもくれても、ジャック、ジャックといつて、それこそ目の中に入れてしまいたいくらいにかわいがって、なんにもしごとはさせず、



ただ遊ばせておきました。

こんなふうで、のらくらむすこをかかえた上に、このやもめの人は、どういうものか運がわるくて、年年ものが足りたなくなるばかり、ある年の冬には、もう手まわりの道具や衣類いるいまで売って、手に入れたおかねも、手内職てないしよくなんかして、わずかばかりかせぎためたおかねも、きれいにつかってしまって、とうとう、うちの中で、どうにかおかねになるものといつては、たった一ぴきのこった牝牛めうしだけになってしまいました。

そこで、ある日、母親は、ジャックをよんで、

「ほんとうに、おかあさんは、自分のからだを半分もって行かれるほどつらいけれど、いよいよ、あの牝牛を、手ばなさなければならぬことになったのだよ。おまえ、ごくろうだけれど、市場いちばまで牛を連れて行って、いいひとをみつけて、なるたけたかく売って来ておくれな。」といいました。

そこで、ジャックは、牛をひっぱって出かけました。

しばらくあるいて行くと、むこうから、肉屋の親

方がやって来ました。

「これこれ坊や、牝牛なんかひっぱって、どこへ行くのだい。」と、親方は声をかけました。

「売りに行くんだよ。」と、ジャックはこたえました。

「ふうん。」と、親方はいいながら、片手にもった帽子をふってみせました。がさがさ音がするので、気がついて、ジャックが、帽子のなかを、ふとのぞいてみますと、きみような形をした豆が、袋の中から、ちらちらみえました。

「やあ、きれいな豆だなあ。」

そうジャックはおもって、なんだか、むやみとそれがほしくなりました。そのようすを、相手の男は、すぐと見つけてしまいました。そして、このすこしたりない、こどもを、うまくひっかけてやろうとおもって、わざと袋の口をあけてみせて、

「坊や、これがほしいんだらう。」といいました。

ジャックは、そういわれて、大にこにこになると、親方はもったいらしく首をふって、「いけない、いけない、こりやあふしぎな、魔法の豆さ。どうして、ただではあげられない。どうだ、その牝牛と、とり

かえっこしようかね。」といいました。

ジャックは、その男のいうなりに、牝牛と豆の袋ととりかえっこしました。そして、おたがい、これはとんだもうけものをしたとおもって、ほくほくしながら、わかれました。

ジャックは、豆の袋をかかえて、うちまでとんできえりました。うちへはいるか、はいらないに、ジャックは、

「おかあさん、きょうはほんとに、うまく行ったよ。」と、いきなりそういって、だいとくいで、牛と豆の

とりかえっこした話をしました。ところが、母親は、それをきいてよろこぶどころか、あべこべにひどくしかったです。

「まあ、なんというばかなことをしてくれたのだね。ほんとにあきれてしまう。こんなつまらない、えんどう豆の袋なんかにつられて、だいじな牝牛一びき、もとも子もなくしてしまうなんて、神さま、まあ、このばかな子をどうしましょう。」

母親はぷんぷんおこって、いまいましそうに、窓のそとへ、袋の中の豆をのこらず、なげすててしま

いました。そして、つくづくなさけなさそうに、しくんしくん、泣きだしました。

きっとよろこんでもらえるとおもっていると、あべこべに、うまれてはじめて、おかあさんのこんなにおこった顔を見たので、ジャックはびっくりして、じぶんもかなしくなりました。そして、なんにもたべるものがないので、おなかのすいたまま、その晩ははやくから、ころんとねてしまいました。

そのあくる朝、ジャックは目をさまして、もう夜があけたのに、なんだかくらいなおもって、ふと

窓のそとをみました。するとどうでしょう、きのう庭になげすてた豆の種子たねから、芽が生えて、ひと晩のうち、ふとい、じょうぶそうな豆の大木が、みあげるほどたかくのびて、それこそ庭いっぱい、うっそうとしげっているではありませんか。

びっくりしてとびおきて、すぐと庭へおりてみますと、どうして、たかいといって、豆の木は、それこそほうずのしれないたかさに、空の上までものびていました。つると葉とがからみあって、それは、空の中をどんとつきぬけて、まるで豆の木のはしご

のように、しっかりと立っていました。

「あれをつたわって、てっぺんまでのぼって行ったら、ぜんたいどこまで行けるかしら。」

そうおもって、ジャックは、すぐとはしごをのぼりはじめました。だんだんのぼって行くうち、ジャックの家は、ずんずん、ずんずん、目の下でちいさくなって行きました。そしていつのまにかみえなくなってしまうました。それでもまだてっぺんには来ていませんでした。ジャックは、いったいどこまで行くのかとおもって、すこしきみがわるくなり

ました。それでもいっしょうけんめい、はしごにしがみついて、のぼって行きました。あんまりたかくのぼって、目はくらむし、手も足もくたびれきって、もうしびれて、ふらふらになりかけたころ、やっとてっぺんにのぼりつきました。

二

ジャックは、そのとき、まずそこらを見まわしました。すると、そこはふしぎな国で、青あおとしげった、しずかな森がありました。うつくしい花のさい

ている草原もありました。水晶すいしょうのようにきれいな水のながれている川もありました。こんなたかい空の上うへに、こんなきれいな国くにがあるうとは、おもってもいませんでしたから、ジャックはあっけにとられて、ただきよとんとしていました。

いつもまにか、ふと、赤い角かくずきんをかぶった、みような顔のおばあさんが、どこから出て来たか、ふと目の前にあらわれました。ジャックは、ふしぎそうに、このみような顔をしたおばあさんを見つめました。おばあさんは、でも、やさしい声でいいました。

「そんなにびっくりしないでもいいのだよ。わたしはいったい、お前さんたち一家いっかのものを守ってあげている妖女ようじょなのだけれど、この五、六年のあいだというものは、わるい魔まもののために、魔法まほうでしばらくしばらくお前さんたちをたすけてあげることができなかつたのさ。だが、こんどやっ魔法がとけたから、これからはおもいのままに、助たすけてあげられるだろうよ。」

だしぬけに、こんなことをいわれて、ジャックは、

なおさらあっけにとられてしまいました。そのほか、
 んとした顔を、妖女はおもしろそうにながめながら、
 そのわけをくわしく話しだしました。それをかいつ
 まんでいうと、まあこんなものでした。

「ここからそうとおくはない所に、おそろしい鬼の
 大男が、すみかにしている、お城のような家がある。
 じつはその鬼が、むかし、そのお城に住んでいたお
 前のおとうさんをころして、城といっしよに、その
 もっていたおたからのこらずとってしまったものだ
 から、お前のうちは、すっかり貧乏びんぼうになってしまっ

たのさ。そうしてお前も、赤ちゃんるときから、か
 わいそうに、お前のおかあさんのふところにだかれ
 たまま、下界げかいにおちぶれて、なさけないくらしをす
 るようになったのだよ。だから、もういちど、その
 たからをとりかえして、わるいその鬼を、ひどいめ
 にあわしてやるのが、お前のやくめなのだよ。」

こういうふうにいいきかされると、ぐうたらな
 ジャックのころも、ぴんと張はってきました。知ら
 ないおとうさんのことが、なつかしくなって、どう
 してもこの鬼をこらしめて、かすめられたたからを、

とりかえさなくてはならないとおもいました。そうおもって、とてもいさましい気になって、おなかのすいていることも、くたびれていることも、きれいにわすれてしまいました。そこで、妖女にお礼をいってわかれますと、さっそく、鬼の住んでいるお城にむかって、いそいで行きました。

やがて、お日さまが西にしずむころ、ジャックは、なるほどお城のように大きな家の前に来ました。

まず、とんとんと門をたたくと、なかから、目のひとつしかない、鬼のお上^{かみ}さんが出て来ました。き

みのわるい顔に似^{にあ}合わず、鬼のお上さんは、ジャックのひもじそうなようすをみて、かわいそうにおもいました。それで、さもこまったように首をふって、「いけない、いけない。きのどくだけれど、とめてあげることにはできないよ。ここは、人くい鬼のうちだから、みつかるよ。晩のごはんのかわりに、すぐたべられてしまうからね。」といいました。

「どうか、おばさん、知れないようにしてとめてくださいよ。ぼく、もうくたびれて、ひと足もあるけないんです。」と、たのむように、ジャックはいいま

した。

「しかたのない子だね。じゃあ今夜だけとめてあげるから、朝になったら、すぐおかえりよ。」

こういつているさいちゆう、にわかにはしん、ずしん、地ひびきするほど大きな足音がきこえて来ました。それは主人の人くい鬼が、もう、そこからかえって来たのです。鬼のお上さんは、大あわてにあわてて、ジャックを、だんろの中にかくしてしまいました。

鬼は、へやの中にはいると、いきなり、ふうと鼻をならしながら、たれだつてびっくりしてふるえ上がるような大ごえで、

「フン、フン、フン、

イギリス人の香かがするぞ。

生きていようが死んでよが、

骨ごとひいてパンにしよぞ。」

と、いいました。すると、お上さんが、

「いいえ、それはあなたが、つかまえて、土の牢ろうに入れてあるひとたちの、においでしよう。」といいました。

けれど鬼の大男は、まだきよろきよろそこらを見まわして、鼻をくんくんやっけていました。でも、どうしても、ジャックをみつけることができませんでした。

とうとうあきらめて、鬼は、椅子いすの上に腰こしをおろしました。そしてがっがっ、がぶがぶ、たべたりのんだりしはじめました。そつとジャックがのぞいてみているすと、それはあとからあとから、いつおしまいになるかとおもうほどかっこむので、ジャックは、目ばかりまるくしていました。さて、たらふく

たべてのんだあげく、お上さんに、

「おい、にわとりをつれてこい。」といいつけました。それは、ふしぎなめんどりでした。テーブルの上にのせて、鬼が、

「生め。」といいますと、すぐ金のたまごをひとつ生みました。鬼がまた、

「生め。」といいますと、またひとつ、金のたまごを生みました。

「やあ、ずいぶん、とくなにわとりだな。おとうさんのおたからというのは、きつとこれにちがいな

い。」と、下からそつとながめながら、ジャックはそ
うおもいました。

鬼はおもしろがって、あとからあとから、いくつ
もいくつも、金のたまごを生ましているうち、おな
かがはってねむたくなつたとみえて、ぐすぐすと壁^{かべ}
のうごくほどすごい大いびきを立てながら、ぐっす
りねこんでしまいました。

ジャックは、鬼のすっきりねむったのを見すまし
て、ちようと鬼のお上さんが、台所へ行っているの
をさいわい、そつとだんろの中からぬけだしました。

そして、テーブルの上のめんどりを、ちよろり小わ
きにかかえて、すたこらお城を出て行きました。

それから、どんどん、どんどん、かけだして行っ
て、豆の木のはしごのかかっている所までくると、
するするとつたわっておりて、うちへかえりました。

ジャックのおかあさんは、むすこが、鬼か魔女に
でもとられたのではないかと心配していますと、ぶ
じでひよっこりかえって来たので、とても大きわぎ
してよろこびました。それから、ジャックのもっ
てかえった、金のたまごを生むにわとりのおかげで、

おや子はお金もちにもなりましたし、しあわせにもなりました。

三

しばらくすると、ジャックはまた、もういちど空の上のお城に行ってみたくなりました。そこで、こんどは、すっかり先^{せん}とちがったふうをして、ある日、豆の木のはしごを、またするするとのぼって行きました。鬼のお城に行つて、門をたたくと、鬼のお上さんが出てきました。ジャックが、またかなしそう

に、とめてもらいたいといつて、たのみますと、お上さんは、まさかジャックとは気がつかないようでしたが、それでも手をふつて、
「いけない、いけない。この前も、お前とおなじような貧乏たらしいこどもをとめて、主人のだいじなにわとりを、ちよつくらもつて行かれた。それから、はまい晩、そのことをい出して、わたしが、しかられどおし、しかられているじゃないか。またもあんなひどいめにあうのはこりこりだよ。」といいました。

それでも、ジャックは、しつっこくたのんで、とうとう中へ入れてもらいました。するうち、大男がかえって来て、また、そこらをくんくんかいでまわりましたが、ジャックは、あかがねの箱の中にかくれているので、どうしてもみつかりませんでした。

大男は、この前とおなじように、晩ばんの食事をたらふくやったあとで、こんどは、金のたまごをうむにわとりの代りに、金や銀のおたからのたくさんつまった袋を出させて、それをざあっとテーブルの上にあけて、一枚一枚かぞえてみて、それから、おは

じきでもしてあそぶように、それをチャラチャラいわせて、さんざんあそんでいましたが、ひととおりたのしむと、また袋の中にしまって、ひもをかたくしめました。そして、天井にひびくほどの大あくび、ひとつして、それなりぐうぐう、大いびきでねてしまいました。

そこで、こんども、ジャックは、そろりそろり、あかがねの箱からはいだして、金と銀のおたからのいっぱいつまった袋を、両方の腕に、しっかりかかえるがはやいか、さっさとにげだして行きました。

ところが、この袋の番人に、一ぴきの小犬がつけてあったので、そいつが、とたんに、きやんきやん吠ほえだしました。

ジャックは、こんどこそだめだとおもいました。それでも、大男は、とても死んだようによくね入っ
ていて、目をさましませんでした。ジャックはむちゅうで、あともみずにどんどん、どんどん、かけて行って、とうとう豆の木のはしごに行きつきま
した。

さて、にわとりとちがって、こんどはおもたい金と銀の袋をはこぶのに、ほねがおれました。それでもがまんして、うんすら、うんすら、ふつかがかりで、豆の木のはしごを、ジャックはおりました。

やっとこさ、うちまでたどりつくとき、おかあさんは、ジャックがいなくなったので、すっかり、がっかりして、ひどい病人になって、戸をしめてねていました。それでも、ぶじなジャックの顔を見ると、まるで死んだ人が生きかえったようになって、それからずんずんよくなって、やがて、しやんしやんあ
るきだしました。その上、お金がたくさんできたとき

きいて、よけいげんきになりました。

四

こうして、またしばらくの間、ジャックは、うちで、おとなしくしていました。するうち、だんだん、からだじゆう、むずむずして来ました。もうまた天^{てん}上^{じょう}したくなくなって、まいにち、豆の木のはしごばかりながめていました。するとそれが気になって、気になって、気がふさいで来ました。

そこで、ジャックは、ある日また、そっと豆の木のはしごをつたわってのぼりました。こんども顔から姿から、すっかりほかのこどもになって行きました。だから、鬼のお上さんは、まただまされて、中に入れました。そして、大男がかえると、あわてて、お釜^{かま}のなかにかくしてくれました。

鬼の大男は、へやの中じゆうかぎまわって、ふん、ふん、人くさいぞといいました。そして、こんどは、なんでもさがしだしてやるといって、へやの中のもの、ひとつひとつみてまわりました。そしてさいごに、ジャックのかくれているお釜のふたに手をか

けました。ジャックは、ああ、こんどこそだめだとおもって、ふるえていますと、それこそ妖女がまもっていてくれるのでしょうか、大男は、ふと気がかわって、それなりろばたにすわりこんで、

「まあいいや。はらがすいた。晩飯にしようよ。」
といました。

さて、晩飯がすむと、大男はお上さんに、

「にわとりはとられる、金の袋、銀の袋はぬすまれる、しかたがない、こん夜^やはハープでもならすかな。」
といました。

ジャックが、そっとお釜のふたをあけてのぞいてみますと、玉でかざった、みごとなハープのたて^{ごと}琴^{ごと}が目にはいりました。

鬼の大男は、ハープをテーブルの上ののせて、
「なりだせ。」といました。

すると、ハープは、ひとりでになりだしました。
しかもその音^ねのうつくしいことといったら、どんな^{がっき}楽器^{がっき}だって、とてもこれだけの音^ねにはひびかないほどでしたから、ジャックは、金のたまごのにわとりよりも、金と銀とのいっばいつまった袋よりも、もっ

「つかまるならつかまえてみる。」
ジャックは、まけずにどなりながら、それでもいっ

ともっと、このハープがほしくなりました。
するうち、ハープの音楽を、たのしい子守うたに
して、さすがの鬼が、いい心もちにねむってしまった。
ました。ジャックは、しめたとおもって、そっとお
釜の中からぬけだすと、すばやくハープをかかえて
にげだしました。ところが、あいにく、このハープ
には、魔法がしかけてあって、とたんに、大きな声
で、
「おきろよ、だんなさん、おきろよ、だんなさん。」
と、どなりました。

これで、大男も目をさましました。むうんと立ち
上がってみると、ちっぽけな小僧が、大きなハープ
を、やつこらさとかかえて、にげて行くのがみえま
した。

「待て小僧、きさま、にわとりをぬすんで、金の袋、
銀の袋をぬすんで、こんどはハープまでぬすむのか
あ。」と、大男はわめきながら、あとを追っかけまし
た。

で、空をみつめていました。

そうこうするうち、大男が追っついてきて、もう片足、はしごにかけました。

「おかあさん、お泣きでない。」と、ジャックは、上からせいっぱいよびました。

「それよか、^{おの}斧をもってきておくれ。はやく、はやく。」

もう一分もまたれませぬ。大男はみしり、みしり、はしごをつたわって来ます。ジャックは、気が気でありません、身のかるいのをさいわいに、ハーブ

しようけんめいかけました。大男も、お酒によった足をふみしめふみしめ、よたよたはしりました。そのあいだ、ハーブは、たえず、からんからん、なりつづけました。

やっそこさと、豆の木のはしごの所までくると、ジャックは、ハーブにむかって、

「もうやめろ。」と、いいますと、それなりハーブはだまりました。ジャックは、ハーブをかかえて、豆の木のはしごをおりはじめました。はるか目の下に、おかあさんが、こやの前に立って、泣きはらした目

た。

ちようどそのとき、いつぞや、はじめてジャックにあつて、道をおしえてくれた妖女が、こんどはまるでちがつて、目のさめるように美しい女の人の姿になつて、またそこへ出て来ました。きらびやかに品のいい貴婦人きふじんのような身なりをして、白い杖を手にもっていました。杖のあたまには、純金じゆんきんのくじやくを、とまらせていました。そしてふしぎな豆が、ジャックの手にはいるようになったのも、ジャックをためすために、自分がはからつてしたことだと

をかかえたなり、はしごの途中とちゆう、つばめのようにはやわぎで、くるりとひっくりかえつて、たかい上からとびおりました。そこへおかあさんが、斧をもつてかけつけたので、ジャックは斧をふるつて、いきなり、はしごの根もとから、ぷつつり切りはなししました。そのとき、まだ、はしごの中ほどをおりかけていた大男が、切れた豆のつるをつかんだまま、大きなからだのおもみで、ずしんと、それこそ地びたが、めりこむような音を立てて、落ちてきました。そして、それなり、目をまわして死んでしまいました。

だよ。」
と、ここの妖女は、いきかせて、ジャックにも、ジャックのおかあさんにもわかれて、かえって行きました。

いって、

「あのとき、豆のはしごをみて、すぐとそのまま、どこまでものぼって行こうという気をおこしたのが、そもそもジャックの運のひらけるはじめだったのです。あれを、ただぼんやり、ふしぎだなあとおもってながめたなり、すぎてしまえば、とりかえっこした牝牛^{めうし}は、よし手にもどることがあるにしても、あなたたちは、あいかわらず貧乏でくらさなければならぬ。だから、豆の木のはしごをのぼったのが、とりもなおさず、幸運のはしごをのぼったわけなの

底本：「世界おとぎ文庫(イギリス・フランス童話篇)

妖女のおくりもの」小峰書店

1950(昭和25)年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。